(5) 間抜けな梯子屋

昔、秋の或る日の夕方の事、秋ともなれば毎年梯子屋が、梯子を売りに田舎を訪ねて来たものだが、その年の秋もやはり梯子屋がやって来た。梯子屋は或る店先に立ち寄り「親方、夕方のことだし安くまけるから、梯子を買わねぇが?」と聞くので、前から梯子を欲しくていた親方は、余り欲しいような顔をせずに値段を聞いたら、「親方のことだ、うんとまけて一、五〇〇円にするべぇー、これ以上なら一円もまけられねぇところだ。ありったけの値段だ」と言うので、親方は暫くの間、買うでもなければ買わない訳でもないような態度でいたら、梯子屋は「おらぁー ちょっとそこら辺りまで、商売するに行って来るから、此の梯子頼むでや」と言い残して、梯子を店先に立て掛けた儘で、どこかへ行ってしまった。

暫くしてから戻った梯子屋は、再び「梯子はいらなかったべがぁー?買ってけれでやー親方」と言うので、「うーん、おらぁー前々から梯子を欲しいと思っていたが、お前も何か俺の店の物で欲しい物はないか?」と聞いたら、「おらぁー、さっきから此のズボンを気に入って、欲しい物だなぁーと思っていたところだが、値段は幾らする物だべぇー?」と聞くので「それは少し品物が良いので一、二〇〇円だでや」と言ってみたところ、梯子屋は「少しまけでけねぇが?」と値切るので「いや、俺の店では総(すべ)てが正札なので、それはお断りだなぁ」と説明し、更にこれに続けて「お前の梯子と差し引きなしの交換をするなら仕方がねぇー、俺も腹を決めるべぇー」と賭(か)けてみたところ、暫く思案顔をしていた梯子屋は、漸く決心したような顔つきで、「よーし決めた。俺の梯子と差し引きなしの交換と行くべぇー、それならよがべぇー?親方」……美事商談成立。

一足のズボンと梯子を取り換えた梯子屋は、どことなく胡散臭(うさんくさ)そうな顔つきで、帰って行ったけどやぁ……。